



コロナに罹患して

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。
「公事宿法律事務所」代表。

令和3年4月26日夜、身体がだるく発熱を感じて体温を計測すると38度6分になっていた。翌27日朝に保健所に連絡をしたところは39度を超えていた。同日、PCR検査を受けたいと伝えたが難しく、翌日に保健所の車両が迎えに来て検査会場へ向かった。その結果(陽性)が出たのが29日木曜日、翌30日になつても宿泊療養施設(ホテル)に入ることもできず、ようやく5月1日にホテルに入れた。

しかし、その夕方には体温が39度7分になり呼吸をするのもしんどい状態となつた。看護師さんの説明では私を受け入れてくれる医療機関は見つからないという。しかし、翌2日、何とか札幌厚生病院のいわゆるコロナ病棟に入院できた。直ちに撮影されたCT画像の所見では、「コロナウイルスの進入を察知した私の身体は多くの免疫細胞を肺へ送り込んだが、この免疫細胞は暴走して私の健康な肺の組織を含め破壊してしまう方向へと進み肺炎となつたと思う。医師からは重傷の1つ下の中等症Ⅱと説明された。その後、退院近くまでステロイドの点滴を続けた。入院後、24時間パルスオキシメータにて酸素飽和度を計測していたが、入院直後は90を切ることもあつた。そして、私が続けてきたこの連載も1回休むこととなつた。入院期間は2週間に及び、ようやく5月15日に退院できた。しかし、残念ながらいまでも強い倦怠感、咳、味覚障害などの後遺症が残つている。

さて、もちろん、私がコロナに罹患した後の病状や経過を伝えることがコラムの目的ではない。ほとんどの国民は、幼いころから具合が悪くなれば直ちに病院に行き治療を受けることができるので、その環境が当たり前の生活を過ごしてきた。しかし、私が発熱した4月26日から病院に入院するこ

とができたのは発熱から6日後であつた。発熱した日から入院までの間、医療機関に行って治療を受けられることが当然のことが当然ではない現実に押しつぶされそうになつた。退院後にHTBの報道を見ると、5月下旬には入院待機人数が3400人に達した際の状況と比較しても現状はさらに厳しい。今となれば、私が発熱6日後に入院できたのは、保健所の方々、ホテルで懸命に何度も私に声をかけてくれた看護師さんたちのおかげであつたと思う。

最近の5月19日の報道によれば、札幌市のコロナ受け入れ可能病床(約430床)の稼働率はほぼ100%に近い。病院に入院することができる自体がミラクルになっている。入院中、関西で入院待機中の若い男性が自宅にて死亡したとの報道に接した。5月28日のNHKの報道によると札幌市内でも入院待機中の4人が死亡し、さらに、6月4日の朝日新聞の報道によれば、自宅療養者に対し札幌市保健所が一度も健康観察をせず自宅にて死亡した事例が起きたことも報道されている。自宅待機の方々が、突如症状が悪化して死亡してしまった懸念がこれからも大きい。

我が国は、どうして最近までワクチン接種率が経済協力開発機構加盟国37カ国中でダントツの最下位になつていたのか、その具体的な原因は何であったのかに關する真摯な議論があまりなされていない。我が国の歴史や国民性を考える時、将来にわたりこの検証はきっと行われないであろう。しかし、自宅待機にて死亡せざるを得なかつた方々の姿は実は私自身の姿であつたかもしれない。絶対に運があつたかどうかなどという話で終わらせ、「のど元過ぎれば熱さを忘れる」で到底済まされることではない。昨今、政府は、ワクチンの入手に目鼻立ちがついたのか、遅ればせながら、打ち手の数を増やすために防衛省の医官、看護官を通じたワクチン接種を東京・大阪で大規模に行い、また、1000名以上の社員などを有する大企業にも集団接種をする方向で話を進める。感染者数の減少とワクチン接種数の増加を日々比較して「喜一憂する底の浅い報道も近いうちに始まるであろう。

昨今の状況に対する具体的な原因も顧みず、ワクチン接種の増加状況を折れ線グラフで指示示されても府の努力を少しずつ賞賛し、ついには政府からオリンピックを中止する旨の報道がなされ、それを首相のご英断と評価し、その後まもなく衆議院議員総選挙へと移行する政府の動きが本当にあつたら、国民も相当バカにされたものだと思う。